

		講義概要 (講師名・所属)
1 限	1 日目 4月15日 (土)	認知言語学 I メンタル・コーパス：導入と拡張 (大堀壽夫・慶應義塾大学教授)
		J. テイラーの提唱する「メンタル・コーパス」の考え方を紹介しつつ、「私たちがことばについて知っていることは何か？」という問いへの答えを考えていきます。その過程で、「記号単位としての言語」、「構文ネットワーク」、「言語的意味と文脈情報」といった、認知言語学の中で（そして見方によっては言語理論全体の中で）重要な考え方を、できるだけ多くの具体例を引きながら説明します。最近の言語処理技術の進歩は目を見張るものがあり、DeepLなどを使ってみるとその完成度に驚かされます。そこには膨大なコーパスに基づいた統計的分析の成果が生かされています。その一方、これまでの考え方で「概念的意味」は直接的な関わりを持たないように見受けられます。言語の理論において、このギャップはどのように捉えたらよいのでしょうか？ 本講義ではメンタル・コーパスの観点からの「折り合い」のつけ方について考察します。受講にあたり、予備知識は不要です。言語学について初めて触れる方は事実の観察の面白さを楽しみ心構え、すでに言語学を学んでいる方は固定観念にとらわれない心構えがあれば充分です。
		実験音声学 (北原真冬・上智大学大学教授)
		音声分析ソフトウェアPraatを用いて、実験のデザイン・実施・分析についての概要を示し、音声学的な実験を行うための導入の第一歩をお伝えします。秋の開講科目「実験音声学」ではPCとヘッドホンをご用意いただき、各自が手を動かして実際の作業手順を学んでいくことを目指しています。春期講座では、講師側のPCでデモを示す形の講義を行い、実験の場面をなるべく具体的にお伝えすることを目標とします。例えば音声産出課題を行うには、被験者ごとにランダムなリストを用い、余計なノイズを立てないように気をつけながら、練習セッションと本番セッションを行う段取りが必要になります。さらに音声にラベル付けを行い、測定値を得るといった仕事もあります。一方音声知覚実験は、刺激を準備し、被験者の課題をコントロールするプログラムが必要です。実験音声学は、実験という手続きにあまり馴染みのなかった方にとってはハードルが高く感じられるかもしれませんが、それほど難しいものではありません。この春期講座を通じてひとりでも多くの方に実験に親しんでいただきたいと思います。
2 限		言語哲学 (峯島宏次・慶應義塾大学准教授)
		言語哲学は、哲学の中でも長い伝統をもち、特にフレーゲ以降の現代哲学では重要な位置を占めてきました。例えば、「人間の思考とはどのようなものか」とか「世界には何があるのか」とかいった大きな問いは、人間の言語を調べることで初めて接近できると考える哲学者がいます。このような哲学へのアプローチは現在、かならずしも多くの支持を集めているわけではありませんが、現在でも言語が哲学者の主要な関心事の一つであることには変わりありません。同時に言語哲学は、言語学の中でも特に意味論・語用論の分野と深く関係しています。言語哲学の概念や方法は、意味と指示、量化や可能世界といった「意味論」の周辺の話から、話者の意図や推論、コミュニケーションや言語行為といった「語用論」の周辺の話まで、多様な領域で使われています。この講義では、理論言語学講座（後期）「言語哲学」への導入として、「言葉の意味を説明するとはどういうことか」という基本的な問いをもとにして、言語哲学の展開の中でいくつかの代表的な考え方について理解を深めたいと思います。
		「日本語の方言」の社会言語学 (小西いずみ・東京大学准教授)
		社会言語学は、言語体系や言語運用を、個人の言語能力としてだけでなく社会制度として捉える言語学の一領域です。本年度の理論言語学講座「社会言語学」では日本語諸方言の語彙・文法を社会言語学的な視点から扱います。春期講座では、理論言語学講座の内容に触れつつ社会言語学の概念やテーマの一端を紹介し

	<p>ます。ある地域・社会で用いられる言語体系を、「日本語」「英語」のように「言語」として扱うのか、「日本語の大阪方言」のようにある言語の「方言」として扱うのかという問題を考えます。一つの回答は、ある言語体系Xと別の言語体系Yを使って相互に意思疎通できるなら、XとYは同じ言語の方言とみなすというものです。しかし、世界には、相互意志疎通がかなり可能なのに別の言語とみなされる場合や、相互意思疎通がほとんど不可能なのに同じ言語の方言どうしとみなされる場合があります。さらに、言語か方言かの位置づけが歴史的に変わることさえあります。この講座では、「日本語の方言」と扱われる（あるいは、歴史的に扱われてきた）ことばを実際に聞き、それらの音韻・語彙・文法上の異同に留意しつつ、「言語」と「方言」の問題について考えます。</p>
3限	<p>言語心理学 言語の理解を科学する (広瀬友紀・東京大学教授)</p>
	<p>言語心理学（または心理言語学）とは、言語という知識体系そのものに加え、その脳内での運用にかかわる人間の認知のしくみのあり方、過程について探求する分野です。言語に関する知識というものがあるとして、それを人間がいかに獲得するのか、そしてそれをどのように使いこなすのか、その際どのような情報を用いることができるのか、ということについて考えていきましょう。そのことにより、私たちが普段当たり前のようにリアルタイムで言葉のやりとりを行っている事実について「人間ってすごい！」とあらためて実感していただけることと思います。本講座では主に、人間の言語理解および産出にかかわる心内の処理について扱います。言語処理にはいくつかの段階がありますが、音声面と統語面の両方について、母語および第二言語も視野にいれつつ、さらに言語間比較研究などについても触れられるような授業にする予定です。時間の許す範囲で実際の研究紹介なども取り入れつつ、言語心理学実験とはどのような発想でデザインされているのかという基本的な約束事となるべく共有できるようにすすめていきたいと思ひます。</p>
	<p>意味論 (酒井智宏・早稲田大学教授)</p> <p>意味論は理論言語学の中で一番とつきやすい分野に見えて実は一番とつきにくい分野です。理由はいくつかありますが、一つだけあげると、意味がどこにあるかわからないことです。音と単語と統語構造は、簡単には言えませんが、がんばればある程度観察することができそうですし(音韻論・音声学、形態論、統語論)、言語の使用は確実に観察することができます(語用論)。これに対して、「鳥」という語の「発音」でも「構造」でも「使用」でもなく、ただ「意味」を観察せよ、と言われても、どこを観察すればよいのか見当もつかないでしょう。このようなときには、「意味」を探すことをいったんあきらめて、「意味を理解するとはどういうことか」を問うという方法があります。「鳥」の語義を理解している人と理解していない人では何が違うのでしょうか。ここで問題になるのが、語義の理解には程度差があり、「理解している vs. 理解していない」の二分法は正しくないということです。春期講座では、「意味の(不完全)理解」という観点から、「意味はどこにあるか」という問題の一端に迫りたいと思ひます。</p>
4限	<p>日本語文法理論Ⅰ 現代日本語の条件表現 (前田直子・学習院大学教授)</p>
	<p>春期講義では、現代日本語文法の記述的研究の方法を皆さんに体験していただきたいと考えています。その具体的な例として、日本語の条件表現を取り上げます。現代日本語の標準語には条件表現が4形式あると言われてています。すなわち「と」「ば」「たら」「なら」です。これらはどのように違うのでしょうか。4形式の違い・使い分けについてはこれまでも多くの研究がなされてきましたが、この講義では、4形式の違い・使い分けを、そもそもどのように調査すればよいのかという方法論から取り上げ、参加者の皆さんとともに考えていきたいと思ひます。また、ことばの調査・研究は、その「目的」によって手法も変わり得ます。この講義では、非母語話者が日本語を学ぶという日本語教育の観点から「と」「ば」「たら」「なら」の違いを考え、学習者にどのように違いを説明することが良いのかを考えます。更に、4形式の違いには、歴史的・地域的(方言)な違いもあります。それらを知ることで、現代語の文法現象を、より多元的</p>

		<p>に理解できること、すなわち現代語の研究も古典語や方言の研究から多くを学べるということについても、体験していただきたいと思っています。</p> <p>生成文法 I (入門) (高橋将一・青山学院大学教授)</p> <p>ことばは、音声などの表現媒体を使用して、意味を伝えるという機能を持っています。また、大抵の場合、1つの音声表現が1つの意味を表しますので、音声表現とその意味は直接的に結びついてペアのようになっていると思われるかもしれませんが、しかし、言語表現の中には、1つの音声表現が複数の意味を表すことがあります。どうしてそのようなことが起こるのでしょうか。文の意味は、文に使用されている単語とその組み合わせ方で決定されると考えた場合、1つの音声表現に複数の意味がある時には、1つの音声表現に対して複数の単語の組み合わせ方があるということになります。生成文法理論では、単語の組み合わせ方を構造と呼び、音声と意味を媒介するものとして、構造を想定します。本講座では、まず、言語には構造が必要であるということを説明します。また、その構造は、音を持ったいわゆる普通の単語からだけでなく、言語表現としては表れない音を持たない単語も含めて構成されていることを見ます。これにより、私たちは、抽象度の高い構造をもとにして言語を使用しているという生成文法の中心的な考えを紹介します。</p>
<p>2 日目 4月16日 (日)</p>	<p>1 限</p>	<p>音韻論 語形成と音韻構造 (窪菌晴夫・国立国語研究所客員教授)</p> <p>語形成は既存の語から新しい語を作り出すプロセスですが、どの言語にも多様な語形成過程があります。日本語の語形成も複合語(コロナ+ワクチン→コロナワクチン)、短縮語(ストライキ→スト、ドライブレコーダー→ドラレコ)、混成語(ゴリラ/クジラ→ゴジラ、千葉/茨城→ちばらき)、頭文字語(NHK、WHO)、逆さ言葉(野菜→サイヤ人、うまい→マイウ)、ポケモンの命名(腕力→ワンリキー、沢村→サワムラー)、赤ちゃん言葉(婆→バアバ、抱く→ダッコ)、ニックネーム(幸子→サッチャン、サッチー、柳田→ギータ)など多様です。これまで語形成と音韻構造の関係は(i)出力の音韻構造がどのような原理によって決まるか(音韻構造の変化)、(ii)出力を音韻構造がどのように制限するか(音韻制約)、(iii)語形成に関わる音韻規則の適用を統語や意味構造がどのように制限するか(統語制約、意味制約)という3つの視点から研究されてきました。この講義では本講座の序論として、この3つの視点を概観します。</p> <p>言葉のフィールドワーク入門 (長屋尚典・東京大学准教授)</p> <p>この講義では、言語研究の基礎となる言語学におけるフィールドワークの初歩を学びます。フィールド言語学は、広く定義すると「ある言語をその言語が話されている自然な環境で研究する方法」のことです。100年以上の歴史を持つ確立された方法論であると同時に、現在、言語学で最も活発な分野の一つです。アメリカの大学院では言語学における必須のトレーニングの一つと考えられており、今年度私が担当する講座「言語類型論入門」の基礎ともなっています。春期講座ではそのフィールド言語学の全体像の導入を行います。扱う主なテーマは、フィールドワークの定義、目的、歴史、調査方法、分析手法、成果発表、言語ドキュメンテーション、研究倫理などです。「母語以外の言語を研究してみたいがどうすればいいの?」「言語学者は世界の少数言語をどのように記述しているの?」「フィールドワークするためには何を勉強すればいいの?」「どんな本を読めばいいの?」春期講座では、そのような疑問に対する答えを探っていききたいと思います。</p> <p>史的言語学 (吉田和彦・京都産業大学客員教授)</p> <p>一般にはあまり知られていませんが、言語学の科学としての存立をはじめて確かなものにした分野は史的言語学(歴史言語学)でした。20世紀に構造主義言語学、さらに生成文法が到来する以前に、ライプツィヒにおいて歴史比較言語学の研究を進めていた「青年文法学派」というグループのひとりであったアウグスト・レスキーンは1876年につぎのように述べています——言語学があらゆる科学のなかでひとつの地位を得るためには、動機づけのない恣意的な音法則を排除し</p>
	<p>2 限</p>	

なければならない——。彼らの研究を推進する原動力になったのは、諸言語の膨大な資料に対して適用される、規則性の原理に支えられた厳密な方法論の確立でした。この授業では、史的言語学における規則性の原理とはどのようなものであるかを、具体的な言語データに基づいて考えます。なお、2023年度理論言語学講座の後期において「史的言語学」を担当します。この授業では、史的言語学のいくつかの方法論について解説したあと、その方法論を諸言語のデータに適用しながら、実際の言語分析を行います。この分析作業により、受講生のみなさんの問題発見能力と問題解決能力が涵養されます。

認知語用論

(松井智子・中央大学教授)

語用論は、会話を中心とした日常的なコミュニケーションのメカニズムを研究する学問分野です。会話で使われる言葉の意味を解釈するとき、また会話の中で言葉になっていないメッセージを汲み取るとき、どちらも相手の「意図」や「態度」といった、目には見えない心の状態を推し量ることが鍵になります。この講義では、コミュニケーションにおいて、相手の意図や態度を推測する能力を「語用能力」としてとらえます。そしてその働きや発達、障害について検討し、後期の理論言語学講座で取り上げる内容の導入とします。言外の意味の理解をも可能にする語用能力を支えるのは、相手の心のうちを読み取る推論能力です。これは、哲学や心理学で「心の理論」と呼ばれる能力と近いと考えられています。本講義では、この心の理論の発達途上である子どもや、心の理論に障害があるとされる自閉スペクトラム症児・者のコミュニケーションの困難さに触れながら、語用能力とは何か、考えていきたいと思えます。

生成文法Ⅱ 省略現象と言語間変異

(斎藤衛・ノートルダム清心女子大学教授)

省略現象の研究は、生成文法理論の発展に大きく寄与してきました。理論の発展とともに、現象の理解が深められ、現象が提示する問題が理論発展の契機となってきました。日英語の比較研究においても、1990年代に省略現象の研究が本格的に開始され、日本語にも、英語と同様に、N'省略、VP省略、スルーシングがあるとの提案がなされます。また、奥聡氏のコネティカット大学博士論文(1989)において、日本語には、英語と異なり、主語や目的語に適用される項省略があることが提案され、現在、項省略は、統語理論、比較統語論の主要研究課題の一つとなっています。本講義では、この歴史を振り返ります。特に、項省略現象が、統語理論に対してどのような問題を提示するのか、また、その解決の方向性として、どのような可能性があるのかを考えます。項省略に見られる言語間変異は何に起因するのか、項省略の分析が、省略現象一般の分析と統語理論の構成に対して示す帰結はどのようなものか、という2つの問いに答えようとする試みをいくつか紹介しながら、今なお残る問題を明らかにして、これから取り組むべき課題について提案を行います。

日本語文法理論Ⅱ コミュニケーションの中の文法

(定延利之・京都大学教授)

3限

伝統的な言語学では、言語は「脱-現場的なもの」と考えられてきました。たとえば、いま、ここにあるリンゴだけでなく、以前に見かけたリンゴ、今度買うかもしれないリンゴ、白雪姫が食べたリンゴなど、すべて「リンゴ」と言うことができます。「リンゴ」ということばは確かに、特定の現場に限られない「脱-現場的なもの」に見えます。しかしそれでも言語の基本は、いま、ここに現実にある発話の現場、そしてコミュニケーションの現場なのだ、というのがこの講義の核となる考えです。こう考えれば、日本語の文法のさまざまな謎を解明する道が見えてきます。たとえば、車が動かない原因を発見すれば、「あ、サイドブレーキかかっている!」と、車内の誰でも言えます。しかし「あ、サイドブレーキかかっていた!」は、運転座席の者にほぼ限られます。これはなぜなのか? またたとえば、「あの人の話、長くない?」と訊かれて、「だ」と答えるのは不自然です。しかし「だな」「だよ」は自然です。なぜなのか? アンケート調査の結果を踏まえて、現場に根ざした文法システムについてお話ししたいと思います。

	4 限	<p>認知言語学Ⅲ</p> <p style="text-align: right;">(池上嘉彦・東京大学名誉教授)</p>
		<p>認知言語学での基本的な操作概念の一つである<事態把握>(construal)を念頭においてのお話です。日本語では<春の到来>を言うのに「春ニナル」というのがふつうです。ところが調査資料によると、ユーラシア大陸東半分のアルタイ系主要言語であるトルコ語、モンゴル語では「春(ガ)ナル」という言い方をしますし、日本語のすぐ隣の韓国語でも同じ言い方です。日本語の「なる」と意味的には十分対応する動詞はあるのですが、この違いはどのように受けとめればよいのでしょうか。さらに、日本語では「春ニナル」と言うのと「春トナル」と言うのではどのような違いが込められているのでしょうか。また、「春(ガ)クル」という言い方はどの言語でもふつうにされるようですが、「ナル」と「クル」の捉え方はどのように違うのでしょうか。もっと視野を広げると、「春デアル」と断定するだけで、<推移>や<移動>の感覚には触れないですます言語、そしてその先には、そもそも、このような場合に使える「ナル」相当動詞を持たない言語もあるということのようです。</p>
		<p>音声学</p> <p style="text-align: right;">(中川裕・東京外国語大学教授)</p>
		<p>春期講座では、2023年度前期に開講する音声学講座「調音音声学」で取り扱う内容の要点に触れながら、音声学の基礎知識と技能を身につけるための勘所を講義します。「調音音声学」の授業では、従来おもに内省による調音的観察の訓練をしてきました。2023年度はそれに、音響的観察をいくつか交えることで、訓練している音声を自分が正しく発音しているかどうかを視覚化して確かめる方法も学びます。「調音音声学」の授業では、聞いたこともない言語音や、日本語や英語にあるのにこれまで気づかなかった微細な発音の区別を、正しく聞き取り、真似して発音し、さらに音声記号で表記する能力を、まず第一に養います。ところが、練習中の自分の発音が正しいかどうか、自信が持てない場合もあるかもしれません。2023年度「調音音声学」では、内省による調音観察の訓練をすると同時に、オンラインで無料入手できる音声学アプリケーションPraat (www.praat.org) を使って、いくつかの音響的側面を視覚化して調音音声学的訓練に役立てる方法を解説します。今回の春期講座では、この「調音音声学」講座のエッセンスをお話しします。</p>